

黒人教会の成立と変容

松岡 泰

はじめに

宗教関係の本を読んだのは、助手の時に一年間読んだのが最初で最後で、それ以来十五、六年ぶりです。で、何が何だか全然わからないという状況です。特に、神学関係になりますと、まったく基礎知識がなくてわかりませんので、歴史の方に逃げていこうということです。今日触れますのは、黒人と宗教ということで、黒人教会についてお話する予定です。

黒人教会というのは、ほとんど馴染みがない言葉だと

思います。全く偶然ですが、私は黒人教会の雰囲気一回だけ触れたことがあります。それは二十年ほど前に日本で、わたしの知り合いから券をもらってイギリスの有名な聖歌隊を聴き、その翌週に、また別の聖歌隊を聴きに行つて、それが偶然ゴスベルソングだったわけです。あまりに雰囲気が違うので、びっくりしたのを覚えています。イギリスのは、中学生から大人まで何十人かがかかります。ハーモニーがとてもきれいで、整然とした雰囲気包まれていたのですが、その翌週に聴いた黒人教会のは、ドラムにトランペット、そしてみんな体を揺らし

て歌ったり踊ったりするので驚いたわけです。それが今から思うと黒人教会の雰囲気だったということです。

「1」教派への所属

ご承知の通り、黒人が所属している教派は、ほとんどバプティストかメソジストです。黒人のメソジストの三大教派は、(a) African Methodist Episcopal Church、(b) African Methodist Episcopal Zion Church、(c) Christian Methodist Episcopal Church で、名前が少し変わっています。イギリスの教会を意味するエписコパルに、メソジストという名前がくっついているからです。これは、ある意味ではアメリカの黒人教会の歴史を表しているようなところがあります。南部にはもともと貴族主義的な文化を含めてイギリス的な伝統が強く残っており、それが教会の教派にも表れております。元来は、エписコパルが比較的強かったわけです。「2」で触れますように、南北戦争が終わり南部に黒人の教会が作られるときに、組合教会とかエписコパルとかプレスビテリアンとか、北部の教会の宣教師たちがたくさんやって来て、黒人用

の教会を作るわけです。とりわけメソジストの影響が非常に強くなって、エписコパルという名称の前にメソジストというのがくっついて、こちらのほうが主流になったのです。そういう意味では、名称が黒人教会の歴史を表しているわけです。

最初の African Methodist Episcopal Church と二番目の African Methodist Episcopal Zion Church はメソジストではいちばん大きく、どちらかと言えば黒人の下層階級の人が主体の教会です。三番目の Christian Methodist Episcopal Church には現在ではアフリカンという用語は使われていませんが、もともとこれは Christian ではなく Coloured Methodist Episcopal Church という名称だったわけです。しかし黒人には一九六〇年代ぐらいまではできるだけ白人的なもの、あるいは白人文化がよいという発想が強かったので、とりわけ黒人の中産階級にはその傾向が強かったため、この階級の人から主として構成されていたこの教会は、この Coloured という呼び名を Christian に変えてしまったのです。できるだけ黒人的なもの、あるいはアフリカの

なものを排除しようとしたわけです。したがってこれも、ミドルクラスの教会だというのがよくわかる名称になっています。

またバプティストにも三つの教派があります。(1) National Baptist Convention, USA. と (2) National Baptist Convention of America は、主として下層階級の信徒で構成されているのに対して、(3) Progressive National Baptist Convention には中産階級の信徒が多いため、Progressive というふうにとニュアンスが違う表現になっております。これらはいずれも黒人教会 (Black Church) と言われるもので、この教会員はほぼ全員黒人です。

アメリカでは日曜日の午前中、人種がいちばん分離するとよく言われます。というのは、白人は白人の、黒人は黒人の教会に通うからです。要するに、人種によって所属教会が完全に異なるので、日曜日の午前中がいちばん人種が分かれる時間帯になるのです。

「2」南部における「黒人」教会 (Black Church) の成立について

(1) 奴隷制時代の教会

こういふふうに、黒人は普通は黒人だけの教会に所属するわけですが、昔から黒人教会が存在していたかという、実はそうではありません。奴隷制時代には、黒人教会というものはありません。というのは、奴隷制時代というのは、人種を分離する時代ではないからです。奴隷制とは白人と黒人がともに一緒に生活する、同じ空間で共存する、そういう体制です。『風と共に去りぬ』という映画の中で、黒人のお婆ちゃんが娘を養育する場面がありますが、白人の家のなかに黒人の乳母がいたり召使がいたりして日常的に接触しています。そもそも白人の子弟というのは大体黒人の乳母の乳を吸って育つというのが普通で、白人と黒人の接触が非常に密なのが奴隷制時代です。

ですから、この時代には黒人教会というのはありません。黒人の場合も、白人の教会に基本的には通います。

白人の教会の後部座席あるいは二階が黒人用になっていました。そこに行つて白人用の説教を聞くというのが普通です。白人の教会に通えない場合はどうするかといいますと、南部の大プランテーションですと、プランターが敷地内に奴隷用の教会堂のようなものを設立しまして、奴隷を日曜日に集めて、伝道牧師を呼んできて説教させます。ただ、大プランターというのは一般の予想に反してほんの一握りの数パーセントしかおりません。ほとんどの場合は、一つの家庭に奴隷が二三人から四五人です。そういう場合は、プランターの奥さんなり子供、娘が黒人に説教するというのが普通です。いずれにしろ、白人と一緒に説教を聞くスタイルです。

一方で、奴隷は白人の教会に通つて白人の説教を聞くわけですが、それと同時に奴隷だけが深夜に集まつて開く集会もありました。夜中に奴隷だけで集まつて集会を開いて、そこで仲間のだれかが説教者になつて熱狂的な状態になっていく、そういう教会、形のない教会(Invisible Church)というのが他方にありました。白人の教会は厳格で形式張つていたのに対して、この秘密の教

会のほうは陶醉性とか興奮状態というのが特徴でした。黒人の場合、特に沿岸部の大プランテーションに属する黒人奴隷には、両方に所属する人も結構いたようです。これが、奴隷制時代の教会です。

ひとこと付け加えますと、奴隷制時代にキリスト教は黒人に対しても布教されていますが、キリスト教を黒人奴隷に教えてよいのかその是非をめぐる議論がありました。積極的に黒人にキリスト教を普及させようとする人たちと、そうではなくて、やはりキリスト教は神の前の平等を説くので危ない、危険思想だから奴隷反乱の温床になると言つて、それに躊躇する人もいました。地域によつて、その受け入れ方はかなり異なっているようです。ただ全体的には、キリスト教を教えたほうが奴隷は勤勉になつて生産性が上がる、あるいは秩序意識を持てるようになるから奴隷反乱を抑えることができるという理由で、奴隷にキリスト教を教えるのが多かったようです。この時代、黒人奴隷にキリスト教を教えるときの説教の要点は、主人に仕えることは神に仕えることを意味し、そうすれば死んでから天国に行けるといふことだ

つたと言われています。特に大プランテーションでカネで雇われる伝道牧師は、プランターの利害を反映せざるを得なかつたようです。

(2) 人種分離制度と黒人教会の成立

ところが南北戦争後になりますと、黒人教会(Black Church)というのが南部で成立してまいります。黒人教会の起源は、奴隷制時代の北部にあります。それは要するに、南部では伝統的に黒人と白人の接触が非常に密であると同時に、白人は黒人の反乱を恐れていましたので、黒人だけで集まつてきちつとした教会を作るというのがなかなかできません。ところが、奴隷制時代の北部ですと、自由黒人(Free Negro)という奴隷でない黒人が、大都市のスラム辺りに密集して住んでいるわけです。その人たちが黒人教会というのを作り始めたと言われています。三大メソジストのアフリカン・メソジスト監督教会なども、一七九〇年代にフィラデルフィアで作られたもので、それがずっと小規模ながら続いて、南北戦争後急速に南部で勢力を拡大していったようです。

なぜ南部で急速に黒人教会というのが成立したかといえますと、それにいちばん貢献したのは人種分離法(Crow Law)の成立です。これは、一八九〇年代から一九〇〇年代にかけて南部のすべての州で成立し、黒人と白人が一緒の場で生活してはいけない、たとえばトイレは別、手洗いも別、乗り物も別、公共の場に黒人は入つてはいけないとか、とにかく人種ごとに生活空間を分けるようなそういう法律が成立します。そうしますと、黒人はこれまで通つていた白人の教会に通えなくなりまして、黒人教会というのが成立せざるを得なくなるわけです。黒人教会は人種分離法の産物であることは明らかです。ところが、黒人教会というのはやはり維持費がかかりますし、それなりに牧師と言いますか教会の指導者を育てなければなりませんので、なかなか黒人だけではやっていけない。その時に北部の慈善団体とか、あるいは北部のいろいろなプロテスタント系の団体が積極的に入つてきまして、南部の教会に支援活動をやります。彼らはセミナリオ・神学校なども作つて、黒人の牧師を養成しました。

(3) 南部の黒人教会の特徴

次に、第二次世界大戦以前の黒人教会の特質についてお話しします。第二次世界大戦までと時代を限定するのはどういふことかと言いますと、その時代までは、黒人の約九〇％は南部に、しかもかなりは農村地帯に住んでいたからです。結論から先に述べますと、その当時の白人教会と比較した場合の南部の黒人教会の特徴は、熱狂性ないしは陶酔性と保守性であったと言われています。

黒人教会の保守性というのは、一つは南部の黒人教会は北部の白人の団体から資金を援助してもらっているの、白人の理事などしょっちゅう見に来るわけで、教える内容まできめ細かく指定していったりします。教える内容は基本的には奴隷制時代に黒人奴隷に教えていたのと同様のものだったようで、「主人に仕えよ、秩序を守れ、酒を飲むな」というようなことが中心になりました。

それからもう一つの「熱狂性(陶酔性)」はどういうことかと言いますと、奴隷制時代の黒人は一方では白人の

教会に通っていましたが、既に紹介しましたように、もう一方で黒人だけの秘密の教会ないしは「見えない教会」(Invisible Church)に通っているわけです。白人が来ない森の中とか沼地・湿地帯とかで開催される教会の特徴は、熱狂性なり陶酔性であったと言われています。ところが、南北戦争後になって教会が公に認められるようになりますと、しかも人種分離法に従って黒人は黒人だけの教会を作らざるを得なくなり、黒人は秘密の集会を開かずには正式の教会に行けるようになります。しかしそれと同時に、その正式に設立された教会に、「見えない教会」に特徴的であった熱狂的な雰囲気があるまま持ち込まれてきます。ですから、黒人教会の大きな特徴であるそういう陶酔性とかそういうものが、ここに出現してくるようになるわけです。要するに、「見えない教会」に特徴的であった「陶酔性」が制度化された教会に持ち込まれ、それが黒人教会の特質になっていくということです。

それからもう一つ、教会の指導者を育てられなかったのも原因です。これはヨーロッパの場合もアメリカの白

人の教会についても似たり寄ったりの状況のようすが、黒人教会の牧師もほとんど字も読めないのが普通で、聖書の知識もほとんど持っておりません。ですから、牧師が教会に来た会員を指導しようとしても、そもそもそういう専門的な素養も持っておりませんので、大体ほとんどが歌って踊る黒人教会にならざるを得なかったわけです。参加者を指導するというレベルでは全くなかったわけです。南部に成立した黒人教会とは、概してこういう内容のものであったようです。

要するに制度化された教会に陶酔性が持ち込まれたわけですが、しかし補足しなければならない点があります。南部の黒人たちはこのような黒人教会に通い始めたと言っても、彼らは依然として白人教会の伝統、すなわち牧師の説教が中心で、静かさと厳肅さで特徴づけられるそのような伝統を引きずっていたわけで、陶酔性もこの伝統によって抑制されていたという点です。

「3」北部への移動と黒人教会の変質

(1) 黒人教会の権威の失墜

これまでは南部についてお話ししてきましたが、二十世紀になりますと、黒人の世界にも大きな変化が生じてきます。つまり、黒人の北部への大移動が始まるからです。一九一〇年代に第一次世界大戦が勃発しますと、北部のほうで工場労働者が不足します。この時に、シカゴとかデトロイトとかいった北部の大都市に、工場労働者として何十万人が移動します。しばらく途絶えますが、第二次大戦から朝鮮戦争あたりにかけて最大規模の移動、四百万人から五百万人が移動します。それにともなうて、教会が非常に変わったと言われております。

南部ではこれまで申しあげてきました体制が、一九五〇年代、六〇年代まで続きます。ところが北部のほうではちよつと事情が違っております。南部から北部に移住して来る黒人は単身が普通で、家族を持っていません。そして、移動したところに秩序も全然ない、相互扶助とかいふような組織もない、教会もない、そういうところ

で黒人が都市部で暮らすわけです。何しろ、その当時の南部の黒人というのは風呂に入る習慣も持っていない、スプーンとかフォークで食べる習慣もない、またほとんど裸足で生活するというのが普通でしたので、そういう黒人が北部にやって来ますと、カルチャー・ショックを受けたと言われています。

北部の大都市に同郷者を中心に「第二のムラ」ができますが、それにしても安心して身を寄せるところがないわけです。北部にももちろん黒人の教会というのがありますが、教会の会員数が桁違いに多く、たとえば千人とか千五百人を越すような大教会になっています。ですから南部からやって来た黒人はそういうところに馴染めなかったと言われています。というのは、南部のほうでは教会は百人とか百五十人とかその程度の規模のものが多かったため、だれか礼拝に欠席すると、牧師が「どうして欠席したのだ」と問い合わせ、すぐに家まで行っているいろいろな世話をしたそうです。ところが、北部の教会では規模が非常に大きくなりまして、会員と牧師との接触がなくなっています。とにかく、南部から移住して来

た黒人の要求に教会が対応できなくなり、教会に人が集まらなくなります。逆に教会としては、都市部に集まった黒人たちをなんとか吸収しないといけないという動きが働きました、そういうところから黒人教会の質がずいぶん変わっていったようです。

また、聖職者の権威の失墜が生じます。南部の方では、黒人中産階級の約半数は牧師だったと言われています。要するに、農村地帯ですので職業の専門分化が全然ないわけです。そういう停滞的な社会の中では、聖職者というのは社会的地位も高く、所得も高い職業です。ですから、出世しようと思ったら南部ではみんな聖職者になつたわけです。ところが、北部にいきますと、いろいろな職業があつて職業選択の自由があり、所得も高くなります。それにともなつて、聖職者の権威も失墜せざるを得ません。

(2) 黒人新興宗教の台頭

以上の指摘からわかりますように、北部の大都市では従来の黒人教会には満足できない人が大勢おり、新興宗

教が台頭してくる十分な素地があつたわけです。教会としては大都会に放り出されカルチャー・ショックに苦しんでいる人々の要求に応えなければなりませんし、またそのことが黒人の教会離れをくい止める方法でもありました。たとえば神聖教会 (Holiness Church) や聖霊教会 (Spiritualist Church) など、信者が教会に集まりますと、

そこで熱狂的に歌いだして陶酔したと言われており、南部以上にもっとその点を派手にしたと言われています。たとえばフィラデルフィアのアイダ・ロビンソンなどは、神聖教会の会員になる条件として、神との交わりの経験、要するに神懸かり的な経験を要求したそうです。

北部で発生した黒人の新興宗教は、概してそういう側面を非常に強く持っています。ただ教会に行つて説教を聞くとかいうのではなく、信者のほうが情緒的にもっと積極的にコミットしていくような、そういう教会になるわけです。そして、だいたい教祖が現人神になりました。「自分は神である」と宣言するのが多かったようです。ハーレムで信者を大勢獲得したデイヴィーン神父もそうで、彼は絶対的な権限を持っていたと言われています。

スピリチュアリスト・チャーチもほとんど同じで、南部の黒人教会に比べますともっと儀式性が薄れており、陶酔性ももっと高まっております。

また教会音楽という点に注目してみますと、黒人教会では以前は抑制がきいた黒人霊歌が歌われていました。しかし二十世紀の前半になりますと、北部の教会ではもっと情緒的なゴスペル・ソングが盛んに聴かれるようになります。ゴスペル・ソングは都市の黒人を教会に引き戻すのに有効であつたからと言われています。

ただ北部の新興宗教について言及する際、補足しなければならぬ点があります。南部から移住して来た黒人には酒や麻薬で身を持ち崩す者が相当多かったようです。ここで紹介しました新興宗教はいずれも性道德、飲酒、喫煙、麻薬などには非常に厳格でした。都市では黒人の若者はしばしばギャングに入ったりしますが、新興宗教の黒人教会は、黒人の不良化を阻止するのにはかなり貢献したようです。現代ですと、ネイション・オブ・イスラムがそれに該当します。

「4」 黒人教会の革新運動

(1) 公民権運動と黒人教会

以上述べてまいりましたことは、教会の質は二十世紀の前半に北部で変化したという点です。ところが黒人教会の内実が本当に問い直されてくるのは、実は一九五〇年代からです。南部では一九五〇年代に公民権運動が台頭してまいります、この運動の担い手になったのはマーティン・ルーサー・キング二世に象徴される牧師の集団で、彼らは黒人社会の中で指導層の中核をなしていました。

この黒人牧師の資質を考える上で忘れてはならない点が二つあります。第一点は、一九世紀末頃から南部でも徐々に黒人は都市に移住して都市生活者になり、それともなつて都市の黒人教会の影響力が強まってきたことです。ただ都市と言いましても、それは北部に見られる大都市ではなく小規模の都市です。そして公民権運動の闘争の舞台になったのも、この種の都市です。第二点は、黒人牧師の世代交代です。黒人の都市居住者が増え、

黒人社会にも僅かながら中産階級が形成されてきますと、都市の黒人教会は財政基盤も安定し、牧師の収入も増えてきます。したがって牧師の二世なり三世になりますと、経済的に不自由のない生活をおくったり、大学や大学院に通う子弟も出現し、インテリ層も登場してきます。キング牧師や彼の腹心と言われたアバナシー牧師などは、その典型です。

このような背景から、伝統的な保守的な牧師とは資質を異にする新しいタイプの牧師が誕生するわけです。キング牧師は黒人教会に特有の陶酔的な雰囲気嫌っておりましたし、また彼は説教こそ牧師の最大の任務と考えていたため、説教の準備に多大な時間を費やしたことは、周知の通りです。一世代前のキング研究では、E・H・エリクソンの学説が流行していたこともあり、キングの青年期の読書体験が研究され、彼の思想にニーバーやバルトなどの白人神学が大きな影響を与えたと紹介されたわけです。ところが最近ブラック・ナショナルリストの研究者が増えてきますと、白人神学がキングに与えた影響は小さく、キングの思想は南部黒人教会の伝統、ひいて

はアフリカの伝統を継承していると論じるようになります。

しかしキングの思想的立場を定めようとする場合は、比較の軸を白人的伝統と南部の黒人的伝統に設定するのは荒削りであり、それよりは寧ろ彼が主として活躍した黒人教会の伝統の中に位置づけるべきであると思います。この観点から見ると、キングは南部の黒人教会の伝統をまるごと継承したのではなく、当時にあつてはそれにならぬ批判的でした。

またこの点と関係してきますが、南部の公民権運動の中心的な担い手は黒人牧師であつたため、黒人牧師は全体的にリベラルな立場をとつていたと想像されがちです。しかし、実はそうではありません。世代交代や公民権運動の経験を通して、黒人牧師の考えは少しずつ変わっていきましたが、彼らは人種差別に反対して団結できたかという点、必ずしもそうではありません。したがって公民権運動の指導者は一方では白人社会からの反撃と闘いながら、それと同時に他方では、黒人教会の保守的な体質と向かい合わざるを得ませんでした。保守的な黒人社会から支持を獲得すること、むしろこの方が難しい

問題だったと思われます。

(2) 黒人神学者ジェイムズ・コーンを中心に

一九五〇年代から六〇年代にかけて、「ブラック・イズ・ビューティフル」(黒人は美しい)というスローガンが出てまいります。従来ですと、ブラック(黒人)は汚い、白人的な文化、白人的な価値観はすべてよいのだ、そういうふうに黒人自身も思っていた。「ブラック・イズ・ビューティフル」という言葉はその価値観をひっくり返し、自分たちの文化や皮膚の色が黒であるということとは全然悪いことではなく、コンプレックスを持つようなことではないのだと宣言したわけです。つまり黒人らしさを全面的に肯定する、そういう運動あるいは発想が生じてくるわけです。この動きと呼応してキリスト教解釈にも、大きな変化が生じます。事情は、以下の通りです。

南部を席巻した公民権運動も一九六〇年代後半から衰退し始め、特にキング牧師が暗殺されると、そしてまた白人との協調を拒否するブラック・ナショナルリズムが黒

人青年たちを魅了し始めると、黒人の青年神学者たちは「黒人が白人と共有しているキリスト教とは何なのか」という大問題に突き当たります。というのは、一九六〇年代ぐらいまでは南部には人種分離があり、また北部にも目に見えない人種差別が厳しかったわけですが、その人種差別なり人種分離を正当化するのに使われたのがキリスト教だったからです。黒人の劣等性というのは、聖書にもちゃんと書いてあることだと言って聖書を持ち出して、人種差別・人種分離を正当化する。それが一九六〇年代まで続いているわけです。

公民権運動を人的に支えたのは黒人牧師であり、思想的に支えたのはキリスト教なのですが、しかしそれと同時に、キリスト教はアメリカ社会の中では人種差別を正当化するイデオロギーとして機能したわけです。ですから黒人神学者の中には、「支配の道具として機能していたキリスト教」とは異なる、そうではないキリスト教というものもあるのではないかと考える人も出てまいります。

たとえばジェイムズ・コーンの黒人神学 (Black

Theology) も、そういう背景から生まれてきます。日本ではアメリカ版解放の神学ということで、彼の翻訳本が多数出版されています。コーン自身もともと南部の生まれで、とにかく子供の頃から、白人にはちゃんとエチケットを持って接しなさいと植えつけられている。そのコーンが神学部に入るために北部にやって来るのですが、人種差別がないと思っていたその北部での人種差別は、ある意味ではもっとひどかったわけです。キリスト教を教える神学校では人種差別はないだろうと思っていると、実は神学校での人種差別もひどく、当時非常に世間を騒がせていた公民権運動については一度も議論されず、ちよつとでもそういう人種関係のことを言うと、ものすごくいやな目で見られて進学停止とかなったようです。

ですから、アメリカの神学とはこんな偽善的な神学なのかということ、コーンは身をもって経験する。大学院ではバルトの神学で博士号を取得していますが、そういうテーマにしないと、要するに博士号を出してくれない。人種的な問題を神学校で出すととたんに拒否されて

しまう。要するにジェイムズ・コーンが黒人の神学というのを打ち出していく背景には、そういう体験があるわけです。したがって彼は、従来の神学というのはすべて白人のための神学であり、人種支配を正当化するための神学であったが、これからの神学は黒人神学であるべきだと宣言します。

コーンに言わせると、キリスト教というのは、もともと抑圧された民に手を差し伸べるような、そういう宗教です。たとえば旧約聖書の出エジプトは抑圧された民を脱出させた事件であり、また新約聖書のイエスはいろいろな宣教活動をしています、宣教活動の対象にしたのも、すべて抑圧された貧しい人々だったわけです。ですからキリスト教というのは、まず第一に抑圧あるいは差別された人々に手を差し伸べるような、そういう宗教であるべきだと結論し、コーンはそこを出発点にする。

ですからイエスというのは現代のアメリカにあつては黒人に手をさしのべる存在で、イエスもまた黒人でないといけないのだということになります。黒人という言葉で抑圧された人々を象徴させているわけですが、現

代にあつて神は黒い皮膚をしているのだということを言うわけです。

コーンはアメリカの白人社会で伝統的に唱えられてきたキリスト教に反旗を翻し、「黒人的な」キリスト教を発掘しようとしています。「黒人的な」キリスト教のルーツを従来のように白人教会のそれやヨーロッパ神学に求めるのではなく、恍惚状態や陶酔状態で特徴づけられる南部の教会に見いだしたり、また極端な黒人神学者は類似の宗教的雰囲気を持つているアフリカの諸部族に求めたります。

ともあれ、黒人神学者コーンが徹頭徹尾批判しているのは、白人のキリスト教の偽善性と同時に、そのキリスト教のイデオロギー性に無自覚・無批判でいる黒人教会です。彼にとつての変革の対象は、先ずもって黒人教会であつたのです。コーンを含め黒人教会の革新派の神学者たちは、伝統的な黒人教会を正面からこのように批判した結果、黒人教会からも門戸を閉ざされ、孤立化していったことは言うまでもありません。

〔5〕イスラム系黒人教会の成立

南部で発展した黒人教会は北部の大都市に移植されたときに変質し、教祖の現人神性と信徒の熱狂性を高めたことは、既に「3」で示したとおりです。これらの新興宗教はいずれも南部の黒人教会のある側面を強調しており、その意味で伝統的な黒人教会の延長線上に位置していると言えますが、しかし南部の黒人教会の伝統とは異質な、もっと独特な宗教も出てまいります。アメリカ・ムーア人科学教会 (Moorish Science Temple of America)、ネイション・オブ・イスラム (Nation of Islam) (以下、ネイションと略す) などは、いずれもタルムードを聖典としているイスラム教の教団です。

特にネイションはキリスト教の持つイデオロギー性にさわめて自覚的な宗教であるため、白人社会への敵意を赤裸々に表明します。コーンはキリスト教の黒人教会にとどまりながら、その保守性を内側から批判した人物の一人ですが、ネイションは伝統的な黒人教会の枠から外に飛び出して、外からそのイデオロギー性を批判してい

ると言えるでしょう。ネイションは白人社会を批判する言辞の激しさの故に、しばしば過激な集団とレッテルを貼られます。しかしネイションが白人社会を糾弾したり、あるいは黒人の団結や黒人の優秀性を強調するのは、それをバネにして、都市の黒人に生きる支えなりプライドを取り戻させようとしているようにも見えます。いずれにしろ、黒人に意識革命をせまる新興宗教であることに変わりはありません。昨年、首都のワシントンで百万人大行進という集会と行進が行われましたが、それを主催したのも、ネイションを率いるルイス・ファラカンという人物でした。

ネイションはマルコムXが活躍した一九五〇年代に発展しておりますので、最近の勢力拡大は第二期に当たります。しかしネイションそれ自体や、ネイションの発展史について述べようとすれば、それだけで一つの論文になるので別の機会に譲るとして、ここでは黒人とイスラム教の関係は今に始まったことではなく、かなり古いんだということを表している一つのエピソードを紹介して、話を終わりたいと思います。

少し前に『African American Christianity』という本

を読んできましたら、アフリカから一八〇年前後に連れてこられた黒人奴隷の場合、その奴隷の二〇%はモスLEMだったと指摘している論文に出会いました。南部のサウス・カロライナとジョージア州の海岸部の所に黒人が昔から住んでいて、そこに黒人のなかではいちばん古い伝統が残っているとされています。白人の場合はアラチア山脈の地方にいちばん古い伝統が残っています。黒人ですとガラ地方、すなわちサウス・カロライナとジョージアの海岸部にある地域に、昔からの習慣・しきたりが残っているとされています。というのは、最初は棉や米の栽培が行なわれましたが、すぐに土地が枯渇してそこは使われなくなり、そこに黒人が住みつき、ずっと外部との接触がなくて二百年ぐらい生きてくるわけです。ですから、言語関係の研究者というのは、大体アメリカ黒人の言葉のルーツをその辺を分析して研究しているようで、事実、その地方の黒人の言葉はアフリカの言葉と非常に近いとされておりま

す。ともあれ、その地方に住んでいた白人の手記があつて、

それを読んできくと奴隷の生活様式というのがずっと書かれていまして、彼らは一日三回あるいは五回、メツカのほうに向かってお祈りをする。食物も豚肉を食べなくて、肉の配給も種類が全然違う。そして、奴隷たちが食べていた食事もお教徒が食べるような食事が多かったと言われております。

黒人のイスラム教と言いましても、私にはどうもピンとこなかったのですが、しかし歴史をさかのぼってアフリカにおけるイスラム教との勢力分布を参考にして冷静に考えますと、奴隷制の時代から、アメリカにはイスラム教徒の黒人奴隷が多数いたとしても、ちっとも不思議ではないわけです。上記の論文が出している数字にどれほどの信憑性があるかは別にして、アフリカから連れて来られた黒人イスラム教徒が植民地時代の初期からアメリカには居たという可能性は高いわけです。それが日本でいう隠れキリシタンのようなかたちでずっと生き延びて、それが歴史の合間合間にときおり噴出してくるのかもしれません。

いずれにしろ、黒人のモスLEM運動は一九一〇年代、

一九三〇年代、一九五〇年代にもあり、そして今またあるわけです。ですから、ブラック・モスレムの運動は、アメリカの黒人が自覚的に黒人であり続けようとした場合には、いつも行き当たらざるを得なかった宗教のようです。

(まつおか やすし・熊本県立大学教授)